「満洲」における日本人子弟子女に対する書方教育

徳　泉　さ　ち

はじめに

日本大学文理学部資料館には多くの「満蒙」関連資料が所蔵される。本稿では，そのうちの岡本育子旧蔵資料を取り上げたい。岡本育子氏は1926年に撫順にて出生し，南満洲鉄道株式会社（以下，満鉄）調査部に勤める父のもと中国東北地域で育った。当資料は，同氏が在籍した日本人学校で課されたテスト，作文，絵画，音楽会のプログラム，褒状や成績表，卒業証書などからなり，1930年代の「満洲」における初等・中等教育の実態を伝える貴重なものといえよう。今回は特に，半紙や書初などの書作品に注目したい。官，民いずれにせよ戦中期の書教育に関する研究は極めて手薄であり，さらに植民地に在住した日本人子弟子女がどのように書を学んだかということは従来，全く触れられてこなかった。今般，当資料の調査により「満洲」における書方教育[1]で使用されていた教科書や教材の一端が明らかになった。本稿では，まず1章において調査報告からはじめ，当地における書方教育の具体的な内容を検討する。次章以降では，「満洲」で教育者らにより発行された機関紙や新聞記事を用いて，書方指導の方針や指導者の動向，また，学外で盛んに行われた書初展覧会をとりあげていく。いまだ資料不足の感は否めないが，岡本育子旧蔵資料を出発点とし，本稿を「満洲」における書方教育の実態解明の端緒としたい。

なお，資料の閲覧調査を快諾し御協力くださいました日本大学文理学部資料館の皆さま，さらに資料に関する貴重な御助言を賜りました本学史学科の松重充浩教授にこの場を借りて心より深謝申し上げます。

1　岡本育子旧蔵資料について

本資料の旧蔵者，岡本育子氏は，1926年に満鉄調査部に勤務する岡本栄氏の次女として撫順に出生した。資料に含まれる通知表と卒業証書より，同氏の幼稚園から高等女学校までの就学履歴を追うことができる。1933年に大連伏見台幼稚園を卒園，同年4月に大連伏見台尋常小学校[2]に入学する。その後，父の転勤に伴い撫順永安尋常小学校[3]や奉天平安尋常小学校[4]へと転校を重ねながら尋常小学校を卒業した。1939年4月に奉天浪速高等女学校[5]へ進

学，2年次から鞍山高等女学校[6]に転校し，1942年に同校を卒業した。各学校の在籍期間が変則的なため，〈表1〉にその経歴をまとめたので参照されたい。

表1

年度	学年	1学期	2学期	3学期
1933年度	尋常小学校1年	大連伏見台尋常小学校		
1934年度	尋常小学校2年	大連伏見台尋常小学校		
1935年度	尋常小学校3年	大連伏見台尋常小学校		撫順永安尋常小学校
1936年度	尋常小学校4年	撫順永安尋常小学校		
1937年度	尋常小学校5年	撫順永安尋常小学校	大連伏見台尋常小学校	
1938年度	尋常小学校6年	大連伏見台尋常小学校	奉天平安尋常小学校	
1939年度	高等女学校1年	奉天浪速高等女学校		
1940年度	高等女学校2年	鞍山高等女学校		
1941年度	高等女学校3年	鞍山高等女学校		
1942年度	高等女学校4年	鞍山高等女学校		

資料の検討に入る前に，岡本氏が就学した当時の「満洲」における教育行政について，簡略ではあるが確認する。「満洲」に住む日本人子弟子女教育の行政制度が本格的に整えられたのは1906年の「関東州小学校規則」（関東州民政署令第13号）の公布にはじまる。[7]全24条からなるこの規則は日本国内の小学校令に準拠した内容であり，使用する教科書について定めた第9条をみると，内地の国定教科書に全面的に依拠することが明記されている。野村章氏は，この時期の植民地の子弟教育は母国と一体不離ならしめようとする方針であったと指摘する。[8]この規則は1908年に「関東州小学校規則」（関東都督府令第5号）となり，以後6回の改定を重ねながら1941年まで継続し，在満日本人教育の基礎をなすものとなった。一方，「満洲国」建国以前，州外の地に設けられていた民間の学校行政を取り仕切ったのが満鉄である。満鉄付属地の小学校に対し，1908年に「南満州鉄道附属地小学校規則」（社則第21号）が制定された。この規則もまた内地の小学校令を基礎とするものであり，「満洲国」の建国後，1937年に満鉄付属地の治外法権が撤廃され満鉄の日本人教育が在満日本大使館教務部に移管されるまでの間，存続した。このように「関東州」と満鉄付属地それぞれの法規が施行されていたが，両者の教育方針には異なる点があったという。竹中憲一氏は，「かなり乱暴ないい方をすれば，この二つの教育政策は，「関東州」においては「内地延長主義」教育の傾向が強く，満鉄付属地においては「現地適応主義」教育の傾向が強かった。この異なる二つの傾向は「関東州」と満鉄付属地が置かれている地理関係，法的性質の違いによるものである。」という。[9]

先述したように岡本氏は，1933年4月より1939年3月の卒業に至るまで「関東州」と「満洲国」内のいくつかの尋常小学校を行き来しながら初等教育を受けた。当資料は小学校時代の

ものが多数を占め，国語，算術，理科，図画など多岐にわたる教科の教材が含まれる。総点数は129点にも及ぶが，本稿では特に書作品に焦点を当てたい。〈表2〉は，資料のなかより書作品のみを抜粋し，書写年代順にまとめたリストである。大半が半紙に毛筆で4から6文字を書いた作品である。1900年8月に小学校令の第3次改正が行われ，小学校令施行規則が制定された。それに伴い，毛筆で文字を書写する「習字」は独立した授業科目ではなくなり，「書キ方」と名称を変え「国語科」の一領域となった。すなわち，これら岡本氏が書き残した作品は国語の授業における成果物ということになる。リストに示したように多数の作品が依拠した教科書が特定できる。いくつか手本が不明なものもあるが，おおむねは内地の小学校と同じ国定教科書を使用していたとみてよかろう。

書方の国定教科書は，使用年次により5期に区分される。岡本氏が小学校に在籍した1933年から1940年は，内地では国定第3期本から4期本が使用されていた時期に当たる。国定第4期本は，『小学書方手本 尋常科用 一学年用』が1933年8月に発行されたのを皮切りに，以後2学年用は1934年，3学年用は1935年と学年進行と同時に順次発行されていった。各学年とも甲種と乙種の2種が発行されており，甲種は鈴木翠軒[10]（1889-1976），乙種は高塚竹堂[11]（1889-1968）が執筆した教科書である。

では，学年順に資料の詳細をみてみよう。No,1から8までは大連伏見台尋常小学校に在籍していた時のものである。この時期は，国定教科書の第3期と第4期の端境期ということもあり，両教科書を使用した作品が混在している。注意すべきは，教科書に同句を見ることができないNo,4・5・7・8である。「甘井子」「大連富士〈図1〉」「星ケ浦」は大連の名勝地の地名であり，教科書とは別に学校独自の教材を使用していたことを窺わせる。なお，資料には岡本氏が大連伏見台尋常小学校から授与された褒状がある〈図2〉。褒状は3年次の書初展の成績優良を称えたもので，No,1〈図3〉もまたこのような校内書初展覧会に出品されたものであろう。

No,9から22は3学年から5学年次の作品で，撫順永安尋常小学校の授業の成果物である。No,18を除き，全てが第4期本国定教科書を手本としている。先述したように第4期本は，甲種と乙種の2種がある。甲乙とも内容は全く同じで，同句を同レイアウトで揮毫しているため，どちらの教科書を採用したのか判別しにくいが，No,15と甲，乙種を試みに並べてみよう〈図4・4a・4b〉。「粉」「界」の字形に注目し3種を比べると，No,15は甲種を手本にしていることが明らかである。なお，撫順永安尋常小学校では自校製の軸線入り半紙を誂ており，書方教育への関心の高さがみてとれる。No,22は，仔細にみると上端左右に画鋲痕がある。いくつかの作品にはもとは赤色と思しき小紙片が添付されており，大連伏見台尋常小学校と同じく作品の展示が行われていたことが想定される。

No,23は6年次の作品で，これもまた国定教科書を使用している。岡本氏は6年の1学期を大連伏見台尋常小学校，2，3学期は奉天平安尋常小学校へと転校しており，この作品がどちらの学校で書写されたものかは不明である。

表 2　岡本育子旧蔵資料 書作品リスト

No	釈文	学年　書写年代	手本	寸法（縦×横）	備考	受入番号
1	クニノタカラ 一月一日 一ノ五岡本育子	1 年　1933 年度	不明	62.2×21.0	元旦書初 大連伏見台での作品 左上に茶色に変色した紙片が貼付	65-29
2	小山川上中下 一年岡本育子	1 年　1933 年度	『尋常小学国語書キ方手本』第一学年用（国定第三期）	32.8×24.4	大連伏見台での作品	65-24
3	もちうすきね 二年岡本育子	2 年　1934 年度	『小学書方手本』二学年下（国定第四期）	32.7×24.0	大連伏見台での作品	65-28
4	甘井子 二ノ五岡本育子	2 年　1934 年度	不明	32.8×24.6	甘井子は大連の地名 大連伏見台での作品	65-34
5	天の川 二ノ五岡本育子	2 年　1934 年度	不明	32.5×24.3	大連伏見台での作品	65-36
6	大日本國の光 三ノ五岡本育子	3 年　1935 年度	『小学書方手本』三学年上（国定第三期）	32.9×24.1	大連伏見台での作品	65-33
7	星ケ浦 三ノ五岡本育子	3 年　1935 年度	不明	33.2×24.1	星ケ浦は大連の地名 大連伏見台での作品	65-35
8	大連富士 三ノ五岡本育子	3 年　1935 年度	不明	33.0×24.0	大連富士は台子山の異名 大連伏見台での作品	65-37
9	子だぬき 岡本育子	3 年　1935 年度	『小学書方手本』三学年上（国定第四期）	33.9×24.3	「甲上」と朱字あり 撫順永安での作品	65-31
10	汽しやでん車 岡本育子	3 年　1935 年度	『小学書方手本』三学年上（国定第四期）	32.9×24.2	「甲上」と朱字あり 撫順永安での作品	65-32
11	冬休竹馬雪兎 岡本育子	3 年　1935 年度	『小学書方手本』三学年上（国定第四期）	33.7×24.5	「甲」と朱字あり 撫順永安での作品	65-16
12	商人売出買物 岡本育子	3 年　1935 年度	『小学書方手本』三学年下（国定第四期）	33.8×24.2	「甲」と朱字あり 撫順永安での作品	65-30
13	太平洋土用波 四年岡本育子	4 年　1936 年度	『小学書方手本』四学年上（国定第四期）	32.8×24.0	「甲」と朱字あり 撫順永安での作品	65-18
14	公園並木新緑 四年諸江先生組岡本育子	4 年　1936 年度	『小学書方手本』四学年上（国定第四期）	32.6×24.0	「甲」と朱字あり 撫順永安での作品	65-23
15	粉ゆき銀世界 四年岡本育子	4 年　1936 年度	『小学書方手本』四学年下（国定第四期）	33.3×24.8	「甲」と朱字あり 半紙は撫順永安尋常小学校特製	65-19

16	柿紅葉峰の寺 四年岡本育子	4 年　1936 年度	『小学書方手本』 四学年下 (国定第四期)	32.6×24.0	「甲」と朱字あり 撫順永安での作品	65-20
17	四方拝初日影 四年岡本育子	4 年　1936 年度	『小学書方手本』 四学年下 (国定第四期)	33.3×24.8	「甲」と朱字あり 半紙は撫順永安尋常小学校特製	65-21
18	金釜釘針鈴銅銀鐵 五年生岡本育子	5 年　1937 年度	不明 『尋常小学校書キ方手本』 三学年下 (国定第二期) に似たものあり	32.8×24.5	12 年 8 月の諸江教諭の確認印あり 撫順永安での作品 右上に茶色に変色した長方形の小紙片が添付	65-15
19	常夏の國南洋群島 五年岡本育子	5 年　1937 年度	『小学書方手本』 五学年上 (国定第四期)	33.3×24.8	半紙は撫順永安尋常小学校特製 右上に赤色の長方形の小紙片が添付	65-22
20	潮干狩花見舟 五年岡本育子	5 年　1937 年度	『小学書方手本』 五学年上 (国定第四期)	33.3×24.8	「甲上」と朱字あり 半紙は撫順永安尋常小学校特製	65-25
21	晩春雲雀麦畠 五年岡本育子	5 年　1937 年度	『小学書方手本』 五学年上 (国定第四期)	33.3×24.8	「甲下」と朱字あり 半紙は撫順永安尋常小学校特製	65-26
22	天皇旗最敬礼 五年岡本育子	5 年　1937 年度	『小学書方手本』 五学年上 (国定第四期)	33.3×24.8	「甲上」と朱字あり 半紙は撫順永安尋常小学校特製	65-27
23	地平線入道雲 六年岡本育子	6 年　1938 年度	『小学書方手本』 六学年上 (国定第四期)	36.2×24.2	「95」と朱字あり 上部の左右角に小さな穴あり　画鋲痕か 大連伏見台か，奉天平安のいずれか判断不能	65-17
24	春共聖恩長 皇紀二千六百年試筆一年は組 岡本育子	1 年　1939 年度	不明	97.6×24.0	奉天浪速高等女学校での作品	65-38

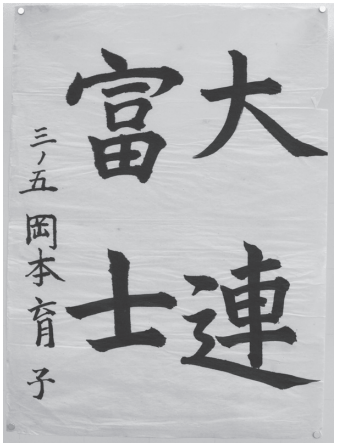

図１　大連富士（No,8）

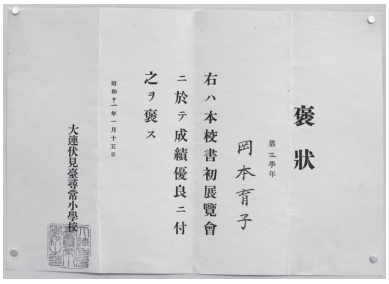

図２　校内書初展覧会褒状

図３　クニノタカラ（No.1）

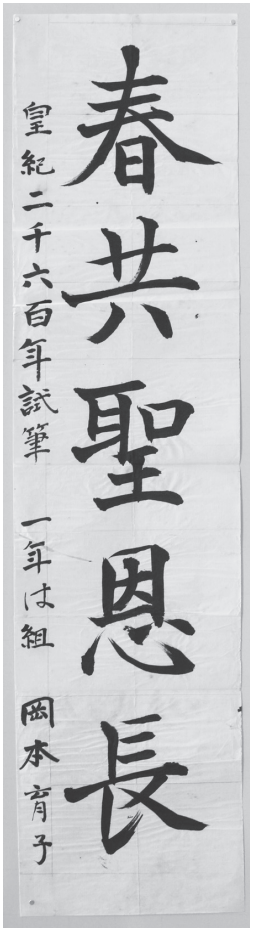

図５　春共聖恩長（No,24）

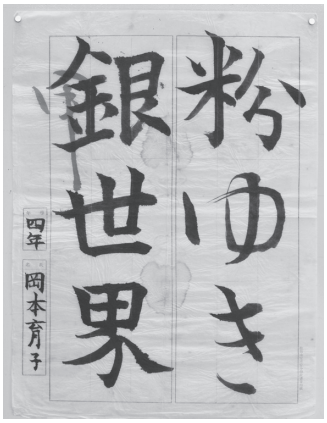

図４　粉ゆき銀世界（No,15）

図 4a　甲種手本

図 4b　乙種手本

No,24〈図5〉の奉天浪速高等女学校での作品はNo,1と同じく書初作品で，この作品に対するものとおぼしい二等の賞状も資料に含まれている。賞状には「賞状／第一学年岡本育子／二等／右ハ本校二千六百年記念／書初展覧會ニ於テ頭書／ノ成績ヲ得タリ仍テ茲ニ／之ヲ賞ス／昭和十五年二月十一日／奉天浪速高等女学校（／は改行を示す）」と記されている。1940年，神武天皇即位紀元二千六百年を記念する様々な行事が内地では催されたが，奉天の女学校にもその熱気が波及していたことになる。[12)]

以上，岡本氏が残した書作品の概要をみてきた。これらの資料は，当時の法規に則り内地と同じ国定教科書がタイムラグなくして授業に使用されていたことを明示している。また，地域に根ざした独自の教材の使用や，自校製の練習半紙の準備などから書方教育の活況がみてとれよう。学内における書初展の開催もまた，その振興ぶりを示唆するものであろう。なお，当時は学内だけでなく，学外においてより規模の大きい書道展も開催されていたことが別資料から知れるが，これについては第3章で後述し補足したい。

2　書方教育の指導方針や指導者の動向について

2-1　「関東州」

前章では岡本育子氏が残した資料を手がかりにし，当時の小学校における書方教育の具体的内容を考察してきた。本章では，管見にふれた関連資料を用いて，これらの授業を運営した指導者側の動向や書方指導の方針の変遷について，「関東州」と満鉄付属地に分けて検討してみたい。

1932年に撰述された筆者不明「関東州教育史第二輯 初等普通教育 邦人小学校編」[13)]では，「関東州」の小学校で行われた各教科の指導内容の変遷が記されており，「読方」「綴方」とともに「書方」の項目も立てられている。同書の「書方教授の変遷」の条によれば，小学校が開設され始めたころは書方教育にまで力を致す余裕がなかったが，1910年に教育研究会での討議を経て『尋常小学書方手本』（国定2期本，乙種）を採用し，その後，1915年には日高秩父執筆の『尋常小学国語科書方手本』（国定第3期本，甲種）の採用に変更されたという。1920年頃より内地で提唱された毛筆廃止論[14)]を受け，「関東州」でも実用主義が高唱されるようになり，硬筆やペン字が毛筆指導と合わせて授業に取り入れられた。当時は読方や綴方に指導の労力が割かれることもあり，毛筆指導は手薄になりがちであったという。昭和初期頃より，児童の書写能力の不振が問題視され，国語科教育会から独立し書方科分科会が設けられた。1930年には，書方教授細目が編成され州内の教育の統一が試みられ，翌年には「硬筆学習帳」や「硬筆書方書取練習帳」[15)]が使用されるようになり，硬筆指導の一層の充実が図られた。書方教育は，他の教科に比べて停滞しがちであったものの，昭和に入ってから指導法に対する研究が旺盛になり躍進的に向上の一路を辿りつつある，と結ばれている。

2-2 満鉄付属地

では，州外の地では如何なる状況にあったのだろうか。当地の教育や指導者の動向を伝える貴重な資料として「満鉄教育たより」[16]を取り上げたい。「満鉄教育たより」は，1934年9月に創刊された満鉄沿線の学校における独自の教育内容や方法を研究，発表するための機関誌（月刊）である。1937年11月発行の第39号をもって終刊となるが，現職教員らが寄稿しており，現地の教育事情や課題を知ることができる。創刊号には，研究会の組織構成が記されている。初等教育研究会は一部と二部に分かれ，各部には科目ごとの分科会が設けられている。一部には11名の教員からなる「書方研究会」があり，二部に，公学堂（日本側が設立した対中国人初等教育機関）の教員ら12名による「習字科研究会」が設けられている。ここでは，日本人子弟子女を対象とした一部の書方研究会の動向を追ってみたい。「満鉄教育たより」を通覧すると，書方研究会の報告記事が全5件確認できる。以下，該当記事の要旨を列記していく。

1934年9月の研究会[17]は，部長と部員の計11人，来賓3人で開催された。協議事項として，満鉄沿線の小学校は内地に比べ毛筆技能が著しく劣っているため毛筆学習の開始を2学年に早めること，さらに教科書については甲乙を比較検討し，甲種を採用することが挙げられている。甲種の採用は，前章の岡本氏の資料No,15の検討で指摘したこととも合致していよう。また，硬筆については，「全国綜合硬筆書方草子」[18]を最良の手本として採用し，2週間に4時間の配当時間のうち毛筆3時間，硬筆1時間とされた。新行事として正月か7月に展覧会の開催が提案され，新聞社に主催を依頼することが議案にあがっている。

翌1935年10月開催の書方研究委員会[19]では，毛筆の開始時期をより早めて1年の2学期にすることが再度確認されている。また，「昨年の書初展覧会は非常に効果があつたと思ふから本年度も是非開催することに決定す」との一文があり，実際に書初展が開催されたことが知れ，さらに二度目の書初展（奉天毎日新聞社主催を交渉中）の準備が進行中であるという。その他に，書方指導者の素質向上のため，書道大家が都満した際には本社から適当な援助を請い，指導の機会を得たいとの要望も寄せられた。教育参考資料として鈴木翠軒や西脇呉石[20]（1879-1970）らの肉筆作品を蒐集し回覧する旨も検討されている。さらに，田中海庵[21]（1898-1975）の書道講習会が実施されたことも記されているが，講習会の詳細など具体的な内容までは言及がなく不明である。

1936年7月の委員会[22]では，改めて毛筆指導の開始時期の議論が重ねられ，1学年から開始する論拠が確認されている。また，本社への要望として沖六鳳[23]（1895-1982）の都満に合わせて書道講習会を開いてはどうかとの提案がなされた。さらに，書道用具の統一をするため，各教員が墨，硯，下敷きや文鎮の比較研究をすること，指導案を分担して作成することが協議事項に挙げられた。

1937年は1月[24]に書方研究会，6月[25]には15日と28日の2度にわたり書方研究部会が開かれた。1月の研究会では，4回目となる満鉄小学校書初展覧会（奉天毎日新聞社主催）に関す

る協議事項がみえる。展覧会は1月29日から31日まで奉天満毛百貨店ギャラリーで開かれ，その後は出品校を巡回する予定という。この展覧会は書方成績の向上と奨励に資することを主眼としており，その目的に沿った審査を行う旨が確認された。同年6月の研究部会では，部長会で決められた各科教授指針の編纂趣旨の説明がなされている。これを受け，2度の研究部会で具体的な「書方教授指針」を編纂するための内容や形式などの詳細が討議され，執筆分担や執筆締め切りが決定された。

以上，「満鉄教育たより」から小学校書方教育に関連する会合の要旨を抜粋してきた。本誌は3年間あまりの短命におわった機関誌ではあるが，当地の教員らの生の声を伝える貴重な記録である。毛筆指導の開始時期を早めることが繰り返し協議されていることは，内地児童の毛筆技能とのギャップが大きな懸念材料であったことを窺わせる。また，校外ギャラリーでの書初展の開催は，書方教育振興への熱意を示すものであろう。なお，教員の指導力研鑽のため，渡満した書家の田中海庵や沖六鳳らを招聘して講習会の開催が計画されていたことは注目すべきである。彼らの講習会に関する資料を見出すことができず詳細は不明であるが，これとは別個に，大連の教員らが東京の書家を招き書道講習会を開催した記録が残されている。以下，やや長くなるがその事例をとりあげ，「満洲」の書方教員が内地に向けていた視線のあり様を探ってみたい。

3　鈴木翠軒による「満洲」での書道講習会

「満鉄教育たより」から，内地の書家を渡満させ書道講習会を開いていたことが知れるが，詳細な記録が残る事例として，本章では鈴木翠軒の講習会をとりあげたい。鈴木翠軒は1933年より使用が開始された小学校書キ方の第4期本国定教科書を執筆した人物である。その教科書は従前のものを一新し，筆力雄頸，運筆暢快，清新で高い風韻を備えると評価されてきた。自身の教科書が使用されている当時，鈴木は日本全国で夥しい数の書道講習会を開催し，多忙を極めていたという。[26] おそらく，このような内地の講習会の活況ぶりが「満洲」の教員らの耳にも入ったのだろう。大連の教員らとの交渉の末，1939年に鈴木は在満日本帝国大使館からの請いを受ける形で，大連，「新京」，奉天へと出向き，各地で書道講習会の講師を務めた。この渡満に随行した鈴木の高弟，金田心象[27]（1908-1990）はその旅行記を書道雑誌『懐風』に3度にわたり連載しており，また，大連嶺前小学校教員の野田南圃（1913-1992）[28] は，大連での講習会体験記を同雑誌に寄せている。[29] 野田の回想によれば，1938年，在満日本人教育会南部会書方分科会において新書方教育の検討がなされた席上で，鈴木の招聘を求める声が教員より上がった。大連では，皇紀二千六百年展を翌年に控えていることも，その懇望に拍車をかけたという。先述した岡本氏が奉天浪速高等女学校で書いた作品（No,24）もまた皇紀二千六百年記念展に出品されたものであるが，大連においても同趣旨の展覧会が計画されていたのであろう。「満洲」において皇紀二千六百年を記念する書道展が複数箇所で開催されていたことが想定されるが，その実態については現在調査中であり，今後，稿を

改めて取り上げてみたい。

では，現職教員らの熱望のもとに渡満した鈴木の旅程や講習会当日の様子について金田，野田の記録に沿いながら辿ってみよう。

10月17日　鈴木，金田，さらに同行者1名で門司港を出発し，19日に大連港に到着。在満日本教育会の面々や南部会会長らの出迎えを受ける。大連神社，中央公園の忠霊塔へ参拝。

10月20日　旅順の戦跡を巡る。博物館の見学後に羅振玉（1866-1940）[30] 宅を訪れる。羅氏は都合がおりあわず，息子の羅君美と面会し，氏の所蔵品を鑑賞。

10月21・22・23日　講習会の開催（大連神社付近の神明会館が会場）。開講前に一同で宮城遥拝，出征兵士や英霊への黙祷を捧げる。参加者の大部分は日本人小学校教員で，若干の中国人が交じり，総勢350名。1日目は，和漢書道史の大要の講義にはじまり，初唐の書家である褚遂良（596-658）の「孟法師碑」の解説と実技講習。2日目は，基本点画の用筆指導にはじまり，同じく褚遂良の書「雁塔聖教序」の解説と実技講習。3日目は，行書，草書と小学書方手本の解説。3日間の講習を終え，野田は「新時代の書方教育の重要性について概念的には自覚しつつも中央の動きに縁遠く，不安を持つてゐた吾々ではありましたが，今回直接に，敬慕する先生の聲茲に接する光栄に浴し漸く確固たる信念を持する事が出来たのであります。」と記している。

10月24日　大連駅を発ち，満鉄あじあで「新京」へと移動。

10月25日 宿舎は日満軍人会館。新京神社，忠霊塔へ参拝。寛城子の戦跡を巡る。「新京」内の参観。

10月26・27日　講習会の開催（敷島女学校が会場）。会員はおよそ200名。講習会の具体的な内容については記述なし。27日の夜，「新京」を発ち，奉天へ。

10月28・29日　講習会の開催（奉天市千代田校が会場）。会員200名余り。安東高女の教員も訪れた。講習会の具体的な内容については記述なし。

10月30日　奉天市内の参観。博物館見学。四平街小学校の門標を揮毫。

10月31日　奉天から釜山へ。

11月1日　帰京

鈴木は，1939年10月17日より11月1日のほぼ半月を費やし，3箇所での講習会を務めた。最も大規模な講習会となった大連では受講者が350名，「新京」や奉天でも200人を超える盛況であり，現行の書方教育理念やその精神を伝える鈴木の講習は「満洲」の地で歓迎されたようである。「新京」や奉天での講習内容は言及がなく不明であるが，大連での記録をみると鈴木が内地で開催していた講習会とほぼ同内容とみてよい。実技を伴う書方の指導法は文献情報だけではなかなかに理解し難いこともあり，渡満した書家から直接学ぶ機会が重要視

されたのであろう。鈴木の講習会の殷賑ぶり，さらに金田の体験記から「満洲」の書方教員らが「中央の動きに縁遠い」ことを不安に感じ，さらに国定教科書の指導方針や最新の教育潮流を積極的に取り入れようとしている姿勢がみえてくる。

4 「満洲」における書初展覧会

2・3・4章では，指導者側の記録から書方教育の実態を追ってきた。本章では，書方教育における一大イベントである展覧会の開催事情に目を向けてみたい。前章までの所々で書初作品や書初展覧会について言及してきた。まず，1章では岡本氏が大連伏見台小学校で「クニノタカラ（No,1)」なる書初作品を残しており，小学校から書初展の褒状を与えられていたことを指摘した。また，2章では「満鉄教育たより」の記事中に1934年から1937年まで毎年1月，小学校書初展覧会が開催された記録が残されていることに触れた。1937年の「満鉄教育たより」では，奉天毎日新聞社が主催になり，1月29日から31日まで奉天満毛百貨店ギャラリーを会場にしたことが記される。これ以降の満鉄沿線の学校による合同書初展については資料が見当たらず不明ではあるが，ほぼ同時期に大連や「新京」でも書初展が開催されており，その詳細を「満洲」で発行されていた日刊新聞である『満洲日日新聞』の記事から拾い出すことができる。以下，『満洲日日新聞』から管見にふれた書初展の記事の要旨を列記する。

①1935年1月31日『満洲日報』(『満洲日日新聞』の前身）朝刊
満洲書道作振会では，大連ロータリークラブ後援のもと，2月1日より3日間三越楼上で，市内小中学生の書初展覧会を開催する。各学校から選抜された優秀作品，全300余点を展示。参考品として古人の筆跡や古墨や古硯などの陳列も行う。
②1936年1月28日『満洲日日新聞』朝刊
大連市役所学務課では，市内小中学校，女子中学校の書方教員らで組織する満洲書道作振会の後援のもと，2月1日より3日間三越楼上で，市内小中学生の書初展覧会を開催する。参加学校は小学校17校全部，女学校5校，商業学校1校で，300点の陳列である。
③1936年2月1日『満洲日日新聞』朝刊
②の展覧会に関する記事であり，公学堂の学生も参加した旨も記される。記事には，「主催大連市役所学務課後援満洲書道作振會の先生達がチヨツキ一つで「のどけき春」をつるしてゐるし「まつたけ，うめ」は一年生の元氣な字，三年生になるとちよつと難しいところで「金州外立斜陽」中学生は「人生感意氣」なんて勇ましいのがある。欧州教育の博愛主義を吹き込み過ぎた我が教育界に近年日本精神の振興，国粋美の復活が高唱される折柄，児童にみづみづしい書道の奨励は，大いに得るところあるを思ひ，これで二回目（満洲）の企てです。」という。
④1937年1月25日『満洲日日新聞』朝刊
「新京」において初等，中等学校連合児童生徒の書初作品展覧会が1月23日より5日間，

三中井百貨店楼上で開催される。

⑤1938年1月28日『満洲日日新聞』朝刊

大連市役所主催により，第4回書初展が1月28日から3日間三越楼上で開催される。27日には学務課員が総動員され展示準備にあたった。作品点数は500点。伏見台，朝日，常盤，大廣場等の大連市内の小学校全てと，甘井子，普蘭店小学校からも出品があった。中学校では，大連一中，神明高女，弥生高女も参加したという。記事では，「流石に中等学校の生徒位になると，「忠孝無殊道」「忠誠尊皇」と難しい文句，六年生位になると「國光宇内に輝く」一年生は「バンザイ」「日本バンザイ」二年生になると「上下一心」「はつ日の光」といつた風，それぞれ児童たちの心に映つたその儘の文字が大人の舌を捲かせる程の雄渾な筆致で書かれ，学務課の人々を驚かせてゐた。」と報じる。

図6

⑥1939年1月28日『満洲日日新聞』夕刊

大連三越による書初展広告〈図6〉

⑦1939年1月29日『満洲日日新聞』夕刊

大連市主催の州内，小中学校書初展が28日から30日まで三越5階会場で開催される。記事に「各校を代表して出品された生徒作品は四百餘點に達し，「勝いくさ」「進め日本」「上下一心」「八紘一宇」「五族協和」等々雄渾な筆蹟にも非常時が顕はれ大人も及ばぬくらゐ見事な出来榮だ」という。

⑧1940年1月27日『満洲日日新聞』朝刊

「新京」の日本教育会主催の第4回全新京日本学童書初展覧会が26日から三中井百貨店で開催される。市内小学校児童から約230点，中学校生徒から約70点，その他62点が展示され，父兄児童多数が訪れた。

⑨1940年1月27日『満洲日日新聞』夕刊

大連三越による書初展広告。1月27日から30日まで。州内中学校生徒並びに各小学校，公学堂児童作品の展観を伝える。

現在確認できた記事に限定されるが，大連と「新京」において小中学校生徒の作品を集めた書初展が開催されていたことが知れる。まず，大連の書初展からみてみよう。1935年より1940年にわたり毎年1月末ころに大連三越を会場に会期3日間で書初展が開催されている。1935年は，満洲書道作振会が主催，大連ロータリークラブが後援となり，1936年は大連市役所主催，満洲書道作振会が後援となっている。1937年は記事が発見できず，1938年は大連市

役所主催，1939年は大連市主催，1940年は三越の広告のみで，記事はなく主催者は不明である。先述したように「満鉄教育たより」によれば，1934年より奉天毎日新聞社主催により満鉄沿線の小学校の合同書初展が奉天満毛百貨店ギャラリーで開催されていた。翌年の1935年より，大連でも同じような行事が開催され始めたことになる。主催や後援は年により出入りがあるが，大連市役所や小中学校の教員が展示実務を担当したのであろう。「関東州」内の小中学校，公学堂より300点から500点の作品が出展されたとあり，その盛況ぶりを伝える。

一方，「新京」の記事は④と⑧のみであった。奉天，大連にやや遅れて1937年から始まり，1940年までの4回，三中井百貨店で全新京日本学童書初展覧会が開催されたようである。大連と同様に市内の小中学校より作品が集められたとあり，⑧の記事によれば日本教育会が主催という。

上記で挙げた『満洲日日新聞』の記事は極めて簡略であり，作品に書かれた具体的な文言や，公学堂の学生が如何なる作品を出展したかなど不明な点も多い。ただし，⑤や⑦の記事では会場に「勝いくさ」「上下一心」「八紘一宇」「五族協和」など軍国主義的な文言や，「満洲国」建国理念を喧伝するような句の作品が並んだことを伝えており，「新京」や奉天の書初展も同様な光景であったことを推察させる。書初とは手本をよく見ながら反復練習をして作品を完成させるプロセスを経る。作品に選択される文言は，触覚と視覚を通して児童生徒らに強い影響を与えることはいうまでもない。この時期，この場所で開かれた書初展は，単なる書方の技能習得や学習成果の発表の場には留まらない。同一の文言が大量に並ぶ展示空間は，国威発揚のプロパガンダとしての機能も担ったのであろう。1941年以後，管見の限りでは展覧会の記事を見出せず，以降の展覧会の動向は不明であるが，これら書初展覧会の詳細は今後も追究を続けたい。

おわりに

本稿ではまず，第1章で岡本育子旧蔵資料の調査結果を概観し，それを踏まえ「満洲」の書方教育は内地と同じく国定教科書が使用されていたことを指摘した。次章より，これらの資料の背景や内実をさらに探るべく，別資料を用いて考察を重ねた。2章では「関東州」と満鉄附属地それぞれの書方教育の指導方針の変遷や指導者側の活動を取り上げた。特に，国定教科書の執筆者である鈴木翠軒が大連，「新京」，奉天において開催した書道講習会に着目したが，この一連の講習会は在満教員らが内地の教育動向に極めて敏感であり，彼らが内地延長的な教育志向を持っていたことを伝える事例といえよう。また，3章では，岡本育子旧蔵資料に含まれる書初作品や展覧会褒状を手がかりにし，「満洲」各地に目をひろげて書初展の開催に関連する新聞記事を拾い上げていった。これら記事によれば，大連や「新京」，奉天の百貨店においてかなり大規模な書初展が開催されていたこと，出展作品には時勢を反映した文言が揮毫され，「満洲」の書方教育にも戦時色が色濃く反映されていたことが明らかになった。

1920年代，満鉄付属地と「関東州」を合わせて小学校に在学する児童はほぼ2万人代であったが，満州事変を経て1936年には約5万人へと増加したという。[31] 各学校や教員により多種多様な書方教育が展開されていただろう。今回，目にした極めて限定された資料を以て「満洲」全土の書方教育を語ることは筆者の本旨ではなく，本稿はあくまで現段階の調査の経過報告とご理解いただきたい。また，1941年に公布された国民学校令が「満洲」の書方教育にどのような影響を与えたのか，さらに，公教育以外，民間の書道団体によって開かれた書道展覧会などについては，本稿では全く言及できなかった。満洲の未来を担うとされた日本人子弟子女が受けた書教育は，植民地に対する日本の文化政策と密接に関連していよう。本稿を水脈の端緒とし，今後もさらなる追究を続けたい。

注

1) 1900年の小学校令の改正により，読書・作文・習字の3科を統合した国語科が生まれ，習字科は書キ方と名称を変えて国語科の一領域となった。以後，1941年の国民学校令により芸能科習字として独立教科になるまでの間は，法令上は「書キ方」と表記すべきであるが，本稿では一般的に通用していた「書方」と表記を統一した。なお「書教育」と表記する際は，学校教育に留まらず広く民間の書塾や家庭教育も含めることとする。

2) 大連伏見台尋常小学校は，1906年，関東州小学校規則の発布によりロシア町の元露国教会堂に設立された。その後，移転や改称を経て1924年に大連伏見台尋常高等小学校となった。嶋田道弥氏は著書『満洲教育史』中で，当校について「現在は教室数は33，学級数25，教員数30名，児童数1243名」と記す。本書の刊行が1935年のため，岡本氏が当校に在籍した当時のおおよその規模を伝えるものとみてよかろう。（嶋田道弥『満洲教育史』文教社，1935年，82～86頁参照。）

3) 撫順永安尋常小学校は，1920年に撫順第二尋常小学校として開校し，後に分離を経て改称し，1928年に撫順永安尋常小学校となった。職員数27名，児童数1067名という（嶋田道弥氏前掲書366頁参照）。

4) 奉天平安尋常小学校は，1934年に開校。奉天の人口増加に伴い児童数が激増し，学級数18，職員数22名，児童数約840名にのぼったという。児童の保護者は鉄路総局，満鉄，日満官吏が大部分を占めていた。（嶋田道弥氏前掲書341頁参照。）

5) 奉天浪速高等女学校は，満鉄沿線において最も古い女学校で，1920年の開校。1934年4月の時点で生徒約800名，職員は30名という。（嶋田道弥氏前掲書397～398頁参照。）

6) 鞍山高等女学校は，1934年に新設された。1935年の段階で，生徒約200名，職員は9名という。（嶋田道弥氏前掲書401～402頁参照。）

7) 在満日本人の教育法規については，磯田一雄・槻木瑞生・竹中憲一・金美花編『在満日本人用教科書集成 第10巻 教育関係法規・解題』（柏書房，2000年）に掲載されたものを参照した。本稿では特に同書所収の槻木瑞生「在満日本人教育の歴史」，「資料解題第10巻教育関係法規」を参照した。

8) 野村章「第一章「満洲」における日本人教育と教科書」（『「満洲・満洲国」教育史研究序説』エムティ出版，1995年，22頁）。

9)　竹中憲一「第三章 関東州と満鉄付属地の教育環境」(『「満洲」における教育の基礎的研究 4 巻 日本人教育』柏書房，2000 年，76 頁)。

10)　鈴木翠軒，名は春視。愛知県の生まれ。30 歳で上京し二松学舎で漢学をまなび丹羽海鶴に師事した。1933 年から 1938 年まで国定教科書を揮毫し，書道教育にも大きな業績を挙げた。

11)　高塚竹堂，名は錠二，別号に笹舟がある。静岡に生まれ，静岡の教員養成所を経て，文部省検定試験に合格した。後に，小野鵞堂や近藤雪竹に師事した。上代様の仮名研究に励むかたわら，小中学校の国定教科書の執筆者としても活躍した人物である。

12)　例えば書道関連では，1940 年 1 月に泰東書道院主催により「皇紀二千六百年奉賛書道展」が東京府美術館で盛大に開催された。この展覧会では少年部が設けられており，会場には公募作品が展示しきれず，前期後期にわけて展示替えを行うほどであったという。また，一万点を超える応募作品を集めた大規模な展覧会として，ライオン歯磨本舗株式会社小林商店が開催した「紀元 2600 年奉祝全国学童『健康報国書方』奉賛会」が挙げられる。この展覧会の理念や応募された作品などは，清水文博「国定第四期書方教科書書風の展開－書方コンクールを中心として－」(『書叢』30 号，2017 年）に詳しい。

13)　「関東州教育史」は，「満洲国」教育史研究会監修『「満洲国」教育資料集成Ⅲ期「満洲・満洲国」教育資料集成 23 巻』（エムティ出版，1993 年）に所収されるうちの 258 ～ 261 頁を参照した。なお,「関東州教育史」は第 1 から 6 輯から成り, 全編手書きによる。発行年は 1928 年，筆者は不明である。同書に付された槻木瑞生氏の解説（3 ～ 5 頁）では，「関東州教育史」の内容の詳しさから考えて筆者は「満洲」の教育活動に直接携わった人物に相違なく,「関東州」の教諭であった黒崎誠三氏であろうと指摘している。

14)　1919 年，時の文部大臣の中橋徳五郎が『東京日日新聞』（1919 年 7 月 28 日）紙上で，学校教育において時間と学用品節約のために毛筆習字を廃止したほうがよいとの意見を提唱した。これを受け，毛筆製造業者や書道会からは続々と反対の声が上がったという。これらの顛末については杉山勇人「中橋徳五郎「毛筆廃止論」に対する書道界の抵抗」(『大学書道研究』第 7 号，2014 年）や，ディオ・ロドルフ「大正時代の「毛筆廃止論争」を検討する」(『書写書道教育研究』第 29 号，2015 年）に詳しい。

15)　これらの教材を特定することはできなかった。今後の課題としたい。

16)　「満鉄教育たより」創刊号～第 39 号は，「満洲国」教育史研究会監修『「満洲国」教育資料集成Ⅱ期　満鉄教育たより』1 ～ 3 巻（エムティ出版，1992 年）に所収されたものを参照した。

17)　「満鉄教育たより」第 3 号，1934 年 11 月 15 日（前掲書所収）

18)　「全国綜合硬筆書方草子」についても教材の特定には至らず詳細は不明である。

19)　「満鉄教育たより」第 15 号，1935 年 11 月 15 日（前掲書所収）

20)　西脇呉石，名は静，福井の生まれ。村田海石に入門し，王羲之や趙孟頫を学んだ。東京に移住後は，国定教科書の執筆に携わった。

21)　田中海庵，名は重二，福井の生まれ。丹羽海鶴に師事して，日本書道連盟参与や，全日本書道教育協会会長等を務めた。

22)　「満鉄教育たより」第 24 号，1936 年 8 月 15 日（前掲書所収）

23)　沖六鳳，名は和市。静岡の生まれ。丁稚奉公をへて上京し，小野鵞堂の斯華会に入門。関東大震災後は帰郷し，近藤雪竹や比田井天来に師事した。1936 年の沖の渡満の経緯などは不明である。

24) 「満鉄教育たより」第 30 号，1937 年 2 月 15 日（前掲書所収）
25) 「満鉄教育たより」第 35 号，1937 年 7 月 15 日（前掲書所収）
26) 鈴木が講師として参加した書道講習会については，清水文博「国定第四期国語書方教科書対応の講習会について」（『書叢』31 号，2019 年）に詳しい。清水氏によれば，鈴木は自らの健康を損なうほどの膨大な数の講習会を日本各地で開催したという。受講者は，小学校中学校の教員のほか，一般研究者も含まれていた。夏，冬，春の学校休業日などに当てられることが多く，講習会は教科書の解説を主な内容とし，大字の示範や中国古典の解説などを交えて実技指導がなされた。「満洲」の講習会と同様，参加人数は 200 人から 300 人ほどの大人数であったという。
27) 金田心象，名は吉尾。北海道の生まれ。文検習字科に合格し，小中学校や女子高等師範学校の習字科での教員を務めた。1943 年に文部大臣官房秘書課嘱託となり，文部省に入省。文部省では習字の教科書執筆や学習指導要領の編纂などに携わった。
28) 野田南圃，本名は康男。大分の生まれ。大分県師範学校卒業後、石橋犀水、伊藤東海らに師事。戦後は，教育行政や教育現場に奉職した。一方で、全国学生書道展審査員や日本書道教育学会評議員などを務め，書道教育に携わった。
29) 金田心象「漫閑有記（満・關遊記）」（『懐風』5 巻 11 号，新興日本書道会，1939 年 11 月），金田心象「漫閑有記（満・關遊記）中」（『懐風』5 巻 12 号，新興日本書道会，1939 年 12 月），野田南圃「翠軒先生書道講習會記（南部會大連）」（『懐風』5 巻 12 号，新興日本書道会，1939 年 12 月），金田心象「漫閑有記（満・關遊記）下」（『懐風』5 巻 12 号，新興日本書道会，1940 年 12 月）を参照した。なお，この論文は山梨大学准教授清水文博氏より貴重な資料をご提供頂き，アドバイスを賜りました。この場を借りて深く感謝申し上げます。
30) 羅振玉，字は叔言，号は雪堂。浙江省上虞県の人。1911 年，辛亥革命が起こり日本に亡命し京都に住んだ。1919 年に帰国。一時，宣統帝の教育にあたり，満州国成立後は参議府参議，監察院長を歴任した。本文にみえるように甲骨，銅器などの資料をひろく所蔵しその研究に従事した。なお羅振玉，鄭孝胥，宝熙は満洲三筆と称され能書としても知られる。
31) 槻木瑞生「在満日本人教育の歴史」（『在満日本人用教科書集成 第 10 巻教育関係法規・解題』柏書房，2000 年，205 頁）

図版出典

図 1・2・3・4・5：筆者撮影　日本大学文理学部資料館所蔵
図 4a・4b：阿保直彦他編集『書写・書道教育史資料』第 2 巻 教科書史（東京法令出版，1984 年）
図 6：1939 年 1 月 28 日『満洲日日新聞』夕刊